

褐毛和種の肥育期間延長による経済効果

野中敏道・齋藤公治・中村秀朗
(熊本県農業研究センター畜産研究所)Tosimichi Nonaka, Koji Saito and Hideaki Nakamura :
The economical effect of extended fattening period in Japanese Brown

褐毛和種の本来の産肉能力を十分に発揮させる肥育技術の体系化に取り組んで来たが、今回、肥育期間の延長が肥育成績に及ぼす効果について検討した。

1 材料および方法

褐毛和種去勢牛16頭を用い、慣行的肥育月齢の24か月齢の他23か月齢、25か月齢出荷の区を設定し（それぞれM区5頭、S区5頭、L区6頭）、各区の肥育成績を比較し、次の結果を得た。なお、粗飼料としては、チモシー、イタリアンライグラスの乾草および稲わらを用い、濃厚飼料は市販品を利用した。

2 結果および考察

1) 枝肉重量等の枝肉歩留に係わる項目で25か月齢肥育のL区が優れたが、肉質では差が見られなかった。しかし、経済性において、S区の枝肉単価が高かったことから、23か月齢肥育が優れる結果となった。

2) 肥育開始時月齢は、S区およびM区が9.3か月齢、L区が9.1か月齢、終了時月齢は、23.0、24.0、24.9か月齢となり、肥育期間は、419、447、482日間となった。

3) 体重は、開始時にS区が310kg、M区が310kg、L区が297kgであり、終了時にそれぞれ751kg、752kg、797kgとなったが、M区で増体がやや劣った（第1表）。

4) 肥育全期間における一日平均増体重は、S区が1.10kg、M区が1.00kg、L区が1.10kgであり、ほぼ同程度であった。

5) 肥育全期間における1日1頭当たりのTDN摂取量は、S区が7.01kg、M区が7.04kg、L区が7.04kgと同程度であったが、TDN要求率は、それぞれ6.68、7.12、6.70を示しM区が高くなった。

6) 枝肉形質のうち、肉質等級では、S区が2.4、M区が2.2、L区が2.3であり、きめ・しまりにおいてはL区がやや良好であった（第2、3表）。

7) 加重平均の1kg当たり枝肉単価は、S区が1,526円で最も高く、次いでM区1,448円、L区1,370円となった。また、1頭当たりの枝肉販売額は、S区が約677千円と高く次いで、L区約676千円、M区約663千円となった。

8) 肥育差益は、S区で約173千円と最も高く、次いでL区約165千円、M区約154千円であった。

9) 肥育後期における肥育期間と肥育成績では期間延長による枝肉重量は増加したが、枝肉成績のうち肉質での有意差は見られなかった。また、今回の試験では経済性において、23か月齢出荷のS区が優れる結果となった。

今回、肥育開始を9か月齢としたが、過去2か年の10か月齢開始と遜色ない肥育成績を示した。また、馴致期における粗飼料多給（粗飼料からのTDN供給量45%、NDF43%）によって肥育全期にわたって良好な発育を示した。

23か月以上において肥育期間延長により、枝肉重量は

増加するが肉質向上の効果は期待できなかった。

肉質の差がないことから枝肉単価を同一と仮定した場合、経済効果は、1か月延長当たり2万円程度の増加が期待できる（第4表）。

第1表 体重の推移

	開始時	馴致期 (56日目)	移行期 (140日目)	肥育中期 (280日目)	後期 (終了時)
S区	297	387	479	644	751
M区	310	383	478	628	752
L区	310	366	466	636	797

第2表 枝肉成績1

	枝肉重量 kg	ロース芯 cm ²	ばら厚 cm	皮下脂肪 cm	歩留基準値 %
S区	460	54	7.2	3.2	72.5
M区	460	48	7.1	3.2	71.7
L区	497	50	7.4	3.2	72.3

第3表 枝肉成績2

	BMS	きめ	しまり	等級				
				A4	A3	A2	B3	B2
S区	2.4	3	2.4		2	2		1
M区	2.6	3	2.4			2	1	2
L区	2.8	3	2.5			4	2	

第4表 効果試算

	枝肉量 Kg	金額 円	飼料費 円	差 円
S区	460.4	644,560	163,984	142,576
M区	459.8	643,720	175,484	130,236
L区	502.8	703,920	185,875	180,045
L区-S区	42.4	59,360	21,891	37,469

注) 枝肉単価1400円、素牛価格33万円、諸経費5千円で試算。